

若返り薬

夢野久作

青空文庫

太郎さんはお父さまから銀色にピカピカ光る空氣銃を一挺頂きました。大喜びで毎日毎日雀を撃つて歩きましたが、一匹も中りあたません。そのうちに弾丸たまが一発も無くなりました。お父様に弾丸たまを買って下さいとお願いしましたが、

「まだ店がお休みだから」

と云つて買って下さいません。雀は表でチュンチュン鳴いて、何だか太郎さんを馬鹿にしているようです。太郎さんは弾丸たまのない空氣銃を抱いて涙ぐみました。

そのうちに不図お祖父様じいさまの手箱の中に赤い丸薬があつた事を思い出しました。ちょうどお祖父様じいは御年始に行かれた留守でしたから、そつとお室へやへ行つて床の間の手箱をあけて丸薬の袋を盗み出しました。

その袋の中には赤い丸薬がたった三粒ありました。空氣銃に入れてみると丁度良い位の大きさです。

太郎さんは大喜びで三粒の赤い丸薬を持って表に出て、屋根の上にいる雀を狙つて一発放しましたが、中りあたませんでした。又一発——又一発——とうとう三粒共赤い丸薬を撃ちましたが、中りあたません。雀は知らぬ顔をしてチュンチュンと囀さえずっています。

太郎さんは急に丸薬が惜おしくなりました。もしやそこに落ちてはいしまいかと門の外へ来てみますと、そこには一人の老人の乞食がいて、三粒の赤い丸薬を汚い黒い掌てのひらに乗せて不思議そうに見ております。

太郎さんは喜ぶまい事か、

「あつ、その丸薬は僕のだ。返しておくれ」

と云いました。

乞食は鬚ひげだらけの顔を挙げて太郎さんをジロジロ見ましたが、やがてニヤリと笑つて、「坊ちゃん。この薬は今しがた私がここにいるときに天から降つて来たのを私が拾つたのです。あなたに上げる訳に行きません」

と云う中うちに汚い手で握り込んでしまいました。

太郎さんは、何という意地の悪い乞食だろうと思つて腹が立ちました。どうかして返してもらおうと思いましたが、しかたがありませんから、お祖父様じいさまの丸薬を盗んだ事を話しますと、乞食はさもさも驚いたという顔をしました。

「それは坊ちゃん、大変ですよ。この丸薬は一粒飲むと一年、二粒飲むと十年、三粒飲むと百年、四粒飲むと千年、五粒飲むと一万年生き延びるのです。もし今日あなたのお祖父じい

様が御病氣になられて、この薬を飲みたいと云われたらどうなさいます。そうしてこの薬がないためにお祖父様が亡くなられたらどうなさいます。あなたはお祖父様のお命を取つたも同然ではありませんか。そんな大切なお薬を雀の生命を取るために使うなどと、まあ何という乱暴な坊ちゃんでしょう。私はあなたのような方にこの薬をお返し申す訳に参りません」

太郎さんは悪かつたと思つて、忽ちワツと泣き出しました。泣きながら乞食に、
「何卒どんな事でもしますから、その丸薬を返して下さい」

と頼みましたが、乞食は意地悪く頭を左右に振るばかりです。

「イエイエ、御返しする訳には参りません。この薬は私が飲んでしまいました」

と云う中に、乞食はその一粒をペロリと飲み込んでしまいました……と思うと、今まで
の乞食の汚い姿は見る間に變つて、一人の立派な旅行商人の姿になりました。

たった一粒の丸薬で乞食から急に旅行商人に變つた姿を見ている太郎さんを見ながら、
乞食の旅行商人はニツコリ笑いました。

「どうです、太郎さん、驚いたでしょう。私は一年前迄はこんな姿だったのです。こうして毎日毎日お薬を売つて歩いたのです。売るお薬というのはたった五粒の丸薬で、名前を

『若返り薬』というのでした。この薬を売って歩いて見ましたが、誰も本当にしてくれませんでした。

その中^{うち}にあなたのお祖父様^{じいさま}ばかりは本当にして下さって、ねだんはいくらだとお尋ね下さいました。私が『一粒で一円、二粒で十円、三粒で百円、四粒で千円、五粒で一万円だ』と申しますと、『それではみんな買ってやるから、その中で一粒飲んで見ろ』と云うお話です。

私は惜^{おし}い事と思いましたが、一粒飲みますと見る間に一年分だけ若返りました。しかしお祖父様は『一年分だけ若返ったのではつまらぬから、今一粒飲んで十年分だけ若返って見せろ』と云う御注文です。

私が御注文通りに十年程若返って御眼にかけると、お祖父^{じい}さまはお喜びになって、『それではあと百年分を一万円で買おう』とおっしゃってお買い下すったのが残りの三粒でした。私はそれから一年の間にすっかりその一万円を使ってしまうて、今年は乞食になっていたのです」

「そんなら、どうしてそんなお薬を手に入れたのですか」

と思わず太郎さんは尋ねました。旅行商人^{たびあきんど}は黙って次の一粒を飲み込みました。すると

それと一所に旅行商人たびあきんどは一人の立派な若い紳士の姿に変わって、髪までも真黒になってしまいました。

二粒目の丸薬で旅行商人たびあきんどから若紳士の姿にかわった乞食は、いよいよ驚いている太郎さんの顔を見て面白そうに笑いながら、又お話を続けました。

「どうです、坊ちゃん、いよいよ驚いたでしょう。御覧なさい。私は十年前ではこの通りの姿でこの国第一のお医者様だったのです。

私は音なしにしていれば、仕事は益々繁昌するばかりであつたのに、思い切つて贅沢ぜいたくをしたばかりに、診みてもらいに来る病人の生命いのちの筋を一人に就いて一年分宛切り取つて、丁度一万年分集めてこの薬を作つたのです。この薬の作り方は誰も知っているものはありません。世界中にただ私ばかりです。この薬を作るためには丁度一万人の人が一年分宛生ずつ命を縮めている筈です。

ああ恐ろしい。人間一人の生命いのちが五十年として、私は二百人分の生命いのちを取っている訳です。それと思うと私は生きていく気持はしません。しかし人の命を助ける役目をする薬で雀の命を取るようないたずら坊ちゃんほどに悪い人間ではありません。

良い者は御褒美ごほうびを受け、悪いものは助けられるのが当り前です。私は悪い事をした罰に

今から直ぐに死んでしまいます。あなたもすぐに私の真似をなさい。左様なら、太郎さんと云ううちに、紳士は掌てのひらに残っていた残りの一粒の丸薬を口に入れました。と思うと、そのままあと形も無く消え失せて、あとには三粒の赤い丸薬が地びたの上にくろがつているばかりでした。

太郎さんは夢を見たように驚いて、暫くはボンヤリその三粒の丸薬を見詰めておりましたが、やがて気がつく、自分もいよいよ死ななくてはならぬのかと思うと、情なくて恐ろしくて、身体からだがガタガタふるえて来ました。恐る恐る丸薬を拾って家へ駈け込んでみますと、いつの間にかお祖父じいさんがお帰りになって、火鉢にあたっておいになります。

太郎さんは紙に包んだ三粒の赤い丸薬をお祖父じいさま様の前へ置いて、最前からの話をして、ふるえながら泣いてあやまりました。

太郎さんのお父様やお母様も、太郎さんの泣き声を聞いて何事かと思って出て来られましたが、太郎さんのお話しを聞くと笑いだして、太郎さんの背中を撫でながら、

「何を言うのだ、太郎さん。そのお薬はお祖父じいさま様が町から買っておいでになった、風邪引きの薬のお余りではないか。もう古い古い事だから利かなくなっているのかも知れない。それを若返りの薬だなど、お前は狐につままれているのじゃないか」

と腹を抱えて笑いころげられました。しかしその中でお祖父^{じい}様だけは笑われずにこう言われました。

「それは太郎の云うのが本当であろう。どんな小さなものでも間違ったしかたで使う事がどんなに悪い事であるかという事が、太郎にだけ本当にわかったのだ。他のものは皆嘘と云っても、太郎だけ本当と思えば、それでいいではないか」

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年5月22日第1刷発行

※底本の解題によれば、初出時の署名は「海若藍平《かいじやくらんぺい》」です。

入力：柴田卓治

校正：もりみつじゅんじ

2000年1月31日公開

2006年5月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

若返り薬

夢野久作

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>